

ティーチング・ポートフォリオ

2023.5.1

藤本 哲也(ふじもと てつや)

北海道科学大学 薬学部 薬学教育学部門 薬学教育学分野 講師

目次

I 教育に関する理念

I-1 教育に対する姿勢

I-2 教育理念に至る経緯

II 教育に関する責任

II-1 授業担当

II-2 教育面での大学運営に関する責任

III 教育の方法

III-1 科目間の知識を活用する力の育成

III-2 場に適応し自ら学ぶ力の育成

IV 教育の成果

IV-1 担当科目の学修成果

IV-2 担当科目に対する学生の取り組み姿勢

IV-3 担当科目に対する学生からの授業評価

IV-4 授業に採り入れた工夫などに対するアンケートのコメントによる評価

V 教育の目標

V-1 短期目標

V-2 長期目標

VI 添付資料

I 教育に関する理念

I-1 教育に関する私の理念

私は「プロフェッショナルを育成する」ということを教育理念として掲げている。言い換えると以下の①～④の要素を持っている人材を育成することである。

- ① 専門家として必要な知識や技能、態度を持っている
- ② 地域や施設における情報収集・分析および問題提起できる
- ③ 様々な問題に対して対処方法・改善策を提案できる
- ④ 周囲と協力し適切に取り組める

I-2 教育理念に至る経緯

私が元々北海道大学薬学部へ入学した動機は分子生物学に関する研究をしたいというものであったが、大学在学中の様々な人との出会いにより、薬剤師という職に興味を持ち、臨床薬剤師を将来の進路とした。大学在学中および大学院在学中より、北海道や日本の医療において薬剤師の職能が十分に発揮できていないと感じていた。「薬剤師は医師や歯科医師の処方内容が適切であることを確認した上で医薬品を提供しなければならない」が、実際には不適切・不適当な処方を書く医師らに毅然と指示できる薬剤師は少ない。また、薬局やドラッグストアなどで直接地域住民へ医薬品の提供や健康指導なども行わなければならないが、来局者に対する適切な病態の評価や、医薬品の提供・指導は十分であるとは言えない。薬剤師は持つべき能力が足りていないか、あるいは発揮できていないのが現状であり、これを改善することが必要だと感じるようになった。そのように考える中で、「地方の現場において、薬物治療の専門家である薬剤師が積極的に関与することで医療を良くしたい・変えていきたい」と考えた私は札幌以外の病院に勤務することを決めた。

薬剤師として勤務を続ける中で徐々にその職場での業務発展に限界を感じるようになった。また、周囲の薬剤師の向上心不足や旧態依然とした薬剤師業務に満足している薬剤師が多いことに対して不満が募っていた。私が勤務していた場所以外において考えても、地方から医療を改善するという目標はあったものの、それ以前の“勤労意欲”が失われつつあった。

そのようなときに北海道大学病院薬剤部長を介して、北海道薬科大学(北海道科学大学薬学部の前身)より声をかけていただき、転職することとなった。転職はしたが、北海道や日本の医療に対する考えは変わることなく、「薬剤師の積極的な関与は医療をより良くする」と考えていた。勤務する場所が変わり地方の現場から医療を変えるのではなく、大学で質の高い薬剤師を輩出することで医療改善に繋がりたいという思いであった。

このような経緯で現職に就き、大学教育に携わるようになり、地方都市へ行くことも多くなった。その中で、改めて都市部(札幌市)への人口集中、過疎化の問題、高齢社会の問題は極めて重要な問題であると認識した。また、北海道に限らず、わが国は大都会から過疎地まであり、また海沿いの街もあれば山間部の街もあるという地域間の違いが極めて大きいことを感じた。これらの問題は私の教育理念に影響を与えるものであり、単に優秀な専門家や優秀な薬剤師を送り出すだけでは不十分で、地域の情勢に対応できる専門家・薬剤師でなければならないと考えるに至った。

以上の様な経緯により「プロフェッショナルを育成する」という教育理念に至った。現在私が所属している大学・学部は北海道科学大学・薬学部であり、当然輩出するプロフェッショナルは「薬剤師」である。私は、薬剤師として十分な能力を持つこと、および各地域の実状に合った対応(情報収集から問題解決まで含む)ができる人材であることの2点を重要視している。I-1で4つの要素を持つ人材育成理念を掲げた。その4要素に至った理由・考えを2点述べる。

まずプロフェッショナル＝薬剤師として十分な能力を身につけさせたいと考えている。薬学部教員としては、基本的な知識・技能・態度を身につけ、医療チームや地域の中でその能力を発揮できることがプロフェッショナルとしての要件であると考えている。だからこそ薬剤師養成課程における知識・技能・態度の教育に妥協は許されないと考えている。薬剤師は生命に関わる仕事であり、勉強不足を含めたミスは許されないと考えている。私自身、病院薬剤師時代に調剤過誤を起こし

たことがある。幸い大事に至らなかったが、その失敗は決して後輩に経験させたくないものである。しかし人間である以上、ミスをしなないということは不可能であり、ミスが生じないシステムを作り上げることの重要性も伝えたいと考えている。

2点目である地域の実情に合った対応ができる、ということである。これは今後、地域医療・在宅医療が中心となることを踏まえ、札幌のような都会と過疎化の進んだ農村・漁村では、それぞれで求められる能力が異なってくる。様々な環境下で多様な問題点に直面しながら自ら考え情報収集する、地域や地域住民の情勢・特性を学び柔軟に対応する、行政を始めとして周囲の方がと協力して取り組む、少しずつでもこれらの能力を修得していける薬剤師を育成することを重要視している。

II 教育に関する責任

私は実務家教員(臨床系教員)として北海道科学大学薬学部勤務しており、医療薬学・臨床薬学科目を中心に受け持っている。また一般社団法人日本在宅薬学会認定のバイタルサイン講習会講師(エヴァンジェリスト)としての資格を持ち、今後の薬剤師に必要なフィジカルアセスメント教育に携わっている。所属する薬学教育学分野は特に低学年への学習支援、卒業困難学生への学習支援も行っており、その担当も担っている。薬学部内のICT担当として関連する授業を担当する他に、他教員や学生に対するサポートやシステムの管理を行っている。

II-1 授業担当

2022年度の担当授業科目を以下に示す¹⁾²⁾³⁾。

科目名	学部・学年・開講期	必修・選択・自由	年度	受講学生数
薬学生入門	薬学部・1年・前期	必修	2022	204名
情報処理法	薬学部・1年・1期	必修	2022	204名
薬と疾病(皮膚・感覚器疾患)	薬学部・4年・1期	必修	2022	179名
臨床薬学実習Ⅱ(液剤調剤)	薬学部・4年・1期	必修	2022	178名
臨床薬学実習Ⅲ(フィジカルアセスメント)	薬学部・4年・2期	必修	2022	178名
臨床薬学実習Ⅴ(水剤調剤)	薬学部・4年・4期	必修	2022	178名
エデュケーションスキル	薬学部・5年・通年	必修	2022	176名
実務実習	薬学部・5年・通年	必修	2022	176名
アドバンスト演習(アドバンスト・フィジカルアセスメント)	薬学部・6年・前期	一部必修 一部選択	2022	176名
手話の基本を学ぶ(基礎編)	薬学部・1～3年・通年	自由科目	2022	4名
手話の基本を学ぶ(応用編)	薬学部・1～3年・通年	自由科目	2022	2名

II-2 教育面での大学運営に関する責任

主となる委員会業務、大学や学部より任せられた業務を示す。

【FD委員】⁴⁾⁵⁾⁶⁾

薬学部FD委員として年間6回、各回1名の教員の授業を参観し、参観後にフィードバック、ディスカッションを実施している。その場では良い点、改善すべき点を職階の隔てなく指摘し、助言なども行っている。自分一人で行える授業は限られており、他の教員の授業改善が結果と

して学生全体のレベルアップになると考えている。薬剤師にとって知識の修得は不可欠であり、より良い授業の実施はその修得の大きな助けになると考えられる。

2022年度は、今年度採用教員に対する「ティーチングステートメント作成ワークショップ」、2019年・2020年度に作成した教員に対する「ティーチングステートメント更新ワークショップ」の運営責任者として担当している。

【LMS 管理マネージャー】

本学では LMS として HUS-Moodle を使用している。マネージャーとして、各科目からの依頼(利用者の登録、変更)、相談(使用方法の疑問など)に応じている。現在は大学の方針(Moodle を使用させない・別の LMS を使わせる)と反して、薬学部として Moodle を継続使用させるための取り組みを行っている。Moodle は操作も簡単であり、学生への資料提示、ルーブリックを用いたフィードバックなど、学習効果を高めるための LMS として利用価値が高いものである。Moodle の継続使用を可能にすべく協働している。

また薬学部では自己学習を促すための自習・演習システム ESS を導入している。こちらについても利用者登録や学籍変更にもなう登録内容の更新を行っている。また、教員や学生からの問い合わせ(パスワード紛失、使用方法の相談など)を受けている。

【薬学共用試験委員、OSCE ステーション管理者】⁷⁾

薬学長期実務実習において、「薬剤師では無いものが調剤等を行う」ことの違法性を阻却するため、薬学共用試験(CBT、OSCE)が設けられている。この試験は全国全ての薬学部で同様である。すなわち一定の知識・技能・態度を有した学生が、指導薬剤師の監督の下で薬剤師業務を行うことを違法ではないという理解がなされている。

その共用試験関連の業務として、OSCE ステーション管理者を担当している。これは試験が滞りなく、公正に行われるよう、担当ステーションの管理運営を行うものである。試験問題の管理も極めて厳重に行われており、自分のみならず関係する教員や評価者、サポーター学生にまで情報漏洩への注意が求められる。※ステーションとは、OSCE で出題される 6 つの課題の各試験会場を指す。

【国家試験委員会】⁸⁾

薬剤師国家試験合格率の上昇は、特に私学において最大の重要案件である。それに関連する委員会として国家試験委員会が存在し、その委員として主として講習会の運営、試験問題の編集、採点業務を担っている。マークシートによる解答用紙の採点、結果のフィードバック、問題分析を担当している。教員が作問した問題の正答率などから問題の適切性なども評価し、フィードバックを行っている。

【実務実習委員・地区担当教員】

薬学部 6 年間で、実務実習(薬局 11 週間、病院 11 週間)は非常に大きな学びの場である。直接的に指導に当たるのは、薬学協議会認定の指導薬剤師であるが、私はその指導薬剤師のサポートをする立場である。同時に学生の実務実習も支援する。実務実習の場は地域の実情や地域医療を学ぶうえで非常に良い学習機会である。臨床現場で on the job training ができる実務実習を円滑かつ効果的に進行させることは極めて重要と考えられる。

【卒業研究指導】⁹⁾

期間にして約 9 ヶ月程度と短い期間ではあるが、薬学部 6 年生一人一人が卒業研究テーマ

を掲げて研究に取り組んでいる。この卒業研究を補佐、指導することも重要な役割である。卒業研究は5年生から6年生にかけて、実務実習のない期間に実施している。薬学部学生の場合、卒業研究と同時に国家試験を念頭に置いた学習も進めなければならない。そのため、卒業研究学生一人一人の成績を考慮しながらの指導を行っている。

Ⅲ 教育の方法

教育理念に基づいて授業あるいは委員会等の校務を務める中で意識している項目を挙げる。

Ⅲ-1 科目間の知識を活用する力の育成

大学教員となって強く感じたことは臨床現場で求められる知識と、大学で学ぶ学生が身につけている知識に大きな乖離があることである。この乖離は学生がもっている知識が誤っているということではない。臨床では統合的な知識が不可欠であるのに対し、大学で学んだ学生の知識は科目毎に分けられた科目間の繋がりが弱いものになっている。このままでは現場で活かせる知識にならないと考えられた。そのため、どの科目を担当するときであっても、今学んでいる内容・今までに学んだ内容・これから学ぶ内容に触れて、科目間連携を意識した授業を実施することを意識している。

Ⅲ-1-① 知識の統合化のためのシミュレーション教育¹⁰⁾¹¹⁾

該当科目：臨床薬学実習Ⅲ・アドバンスト演習

フィジカルアセスメントを担当している。本実習内容は、薬剤師業務として新しい領域のものである。そのため、学生には新鮮に感じてもらい、興味を持って取り組んでもらうこと、今まで学んできた科目(生物学、機能形態学、薬理学、薬剤学、薬物治療学など)を統合して知識を活性化することを重視している。そしてできる限り本物に近づけたいと考えており、シミュレーター(フィジカルアセスメントシミュレーター、血圧測定シミュレーター、多職種連携教育シミュレーター)を導入している。更に、シミュレーターの限界(人形であること)を考慮し、模擬患者を活用したハイブリッドシミュレーション実習として実施している。

同時にシナリオとして用いる症例としては薬剤師国家試験で問われるような症例に基づく薬学的アセスメントの考え方、ポイントについてSGDを通じて学習する。私の理念から見れば国家試験合格は1つのマイルストーンに過ぎないが、ほとんどの学生にとってはゴールである。ゴールは決して遠いものではないことを意識させモチベーションを高めることを狙っている。

Ⅲ-1-② グループディスカッション¹¹⁾¹²⁾

該当科目 エデュケーションスキル・アドバンスト演習

エデュケーションスキルは、5年次に必須であるSA業務をただの作業としないために、また、薬剤師として卒後に後輩を育てる技量を身につけるための教育に関する授業である。良い教育者とは何かという議題についてはGoogleスライドを使ったスモールグループディスカッションを通じてグループ内の議論、共有を図っている。グループ内あるいはクラス内で様々な意見を出し合い、視野を広げていくことは多面的なものの見方を身につけることに繋がっていく。

アドバンスト演習(フィジカルアセスメント)では、症例ベースのディスカッションを行う。この科目は6年次であり、参加している学生がそれぞれ別の地域・施設で実務実習を行ってきて

いる。その経験を元にしてグループディスカッションが行われるため、1つの疾患であっても多面的な視点を身につけることができる。また自分自身に欠けている知識にも気づきやすい。

Ⅲ-1-③ 薬学共用試験をマイルストーンとした取り組み

薬学共用試験は合格しなければ実務実習に行くことができず、また全国の薬学部・薬系大学全てで共通の基準で採点されている。国家試験に準ずる位置づけの極めて重要な試験である。低学年次学生の学習到達の中間目標としても有用な試験である。大学入学後から計画的に学修を積み重ねていくことを意識付けさせる効果が期待される。

Ⅲ-1-④ FD 活動を通じた授業改善

学生の声を聞くために学生 FD 委員を選定し、年 2 回学生との懇談会を設定している。学生が普段受講している授業の率直な感想や要望などを聞くことができる貴重な機会であるため、学生 FD 委員が率直な意見を出せる環境を設定することを重視している。科目間連携の提案等をもらうことができている。

Ⅲ-2 場に適応し自ら学ぶ力の育成

元々私自身が授業(新しい知識を得られる場)を楽しんでいるからかもしれないが、現在の学生は、勉強はつらいものと感じているように見受けられる。自分のため・自分が成長するための授業・勉強ではなく、テストのため・単位のために仕方なく受けているのが授業のように思える。教員が学生に対し「自分自身のための学習である」と話しても、それまでに身に付いた考えはなかなか変えられないと感じた。そこで私はアプローチの方法を変えて、「授業を楽しくして、楽しい学習を繰り返してみよう」と考え、学生が「面白そう、楽しい」と思ってもらえるように工夫を取り入れている。楽しい学習の記憶が増えることで前向きに授業に取り組んでもらえることを期待している。

薬剤師に限らないことであるが、生涯学習は不可欠であり、大学卒業後は自ら学ぼうとしなければ学ぶ機会がないのが実状である。言うなれば、勉強嫌いだから自己学習しない、では通用しないのが現代社会であると考え。インターネットの普及により地域間の学習機会格差は少なくなったが、抱えている問題点は各地域・各施設によって異なる。その地域・施設に応じて自ら学ぶ力を持つていくことがプロフェッショナルとして必要である。

Ⅲ-2-① 自己学習推進と授業効率化のための反転授業¹²⁾¹³⁾¹⁴⁾

該当科目 臨床薬学実習Ⅱ・臨床薬学実習Ⅲ・臨床薬学実習Ⅴ

これらの科目では反転授業(ブレンディッドラーニング)を採用している。従来までは実習時間内に教員が口頭で説明したり、デモンストレーションしたりしているところを、可能な限り動画を事前収録として、学生に開示している。学生にはガイダンス時に事前学習するよう指示している。これにより学生は動画による自己学習が習慣化すること、実習に要する時間が短縮されることで余裕が生まれセルフマネジメントの力を育むことに繋がると考えられる。

該当業務 LMS 管理

Ⅲ-2-② 自己省察による学習¹²⁾¹³⁾¹⁵⁾

該当科目 臨床薬学実習Ⅱ・臨床薬学実習Ⅲ・エデュケーションスキル

自己省察は大人の学びにとって非常に重要な要素であり、そのトレーニングの1つとして学習などでは省察レポートを課している。実習や SA 業務の中で何を学んだかが、今までの自分

と照らし合わせながら省察する。その省察が適切になされているかをルーブリックで評価、フィードバックしている。学生にはフィードバック(評価)したことを伝え、疑問のある学生には面談で対応、指導している。

Ⅲ-2-③ スマートフォンを用いたクリッカーと質問システムの実施¹⁶⁾

該当科目 薬と疾病(皮膚・感覚器疾患)

授業にゲーム感覚を採り入れ、楽しそうだと考えてもらうために Slido や Participoll といったツールを使用している。他学生の解答状況が表示されるため、周囲の理解度も把握でき、学習促進に繋がると考えている。また、匿名での質問が可能であり、比較的内気な学生であっても質問しやすい。また、質問についてはメールでも随時対応しているが、タイムラグがあるため、できるだけリアルタイムで対応できるツールとして上記のものもメールと併用している。

Ⅲ-2-④ e-ラーニングを活用した自己学習の推進

教育支援システム ESS は国家試験問題などを自習させるのに有用なツールである。ESS に頑張って取り組んでいる学生が成績向上以外の利点が得られるよう、アドバンスト演習選択区分の選定に活用するという取り組みを行っている。これらのシステム管理を担うことを通じて、学生の教育環境を整えて学生の自発的学習を促している。生涯学習が不可欠な薬剤師として自ら学ぶ姿勢の修得に繋がるものと考えられる。

IV 教育の成果

IV-1 担当科目の学修成果¹⁷⁾⁻²⁶⁾

2022 年度担当科目の成績結果を示す。分担科目については担当区分の得点率のみを、全般を担当した科目については全体の得点率と平均 GPA を示す。調剤系の実習は「できるようになること」が目標であるため、全体的に成績評価は高いものとなっている。主たる評価方法がレポートや実技の観察であったが極端に偏っていることはないと考えられる。

授業科目	担当区分	平均得点率/平均 GPA
薬学生入門	健康への価値観を高める	87.3%
情報処理法	全般	83.8%/2.93
薬と疾病(皮膚・感覚器疾患)	薬物治療領域	小テスト 90.6% 定期試験 75.5%
臨床薬学実習Ⅱ	液剤調剤	95.0%
臨床薬学実習Ⅲ	フィジカルアセスメント	85.3%
臨床薬学実習Ⅴ	水剤調剤	92.0%
エデュケーションスキル	全般	85.6%/3.23
アドバンスト演習	アドバンスト・フィジカルアセスメント	87.6%

IV-2 担当科目に対する学生の取り組み姿勢²⁷⁾²⁸⁾

2022 年度担当科目における、学生の意欲、目標達成度、自己学修時間の評価を示す。5 段階評価であるが、慣例に従い平均値で示している。

いずれの科目も他の教員との共同実施であるため、他の教員の要因・影響があることを踏まえて評価する。全体的に 5 段階評価の平均 4 以上が付けられていることから、意欲的に取り組んだ学生が多いことが推察される。比較的低い結果となったアドバンスト演習であるが、6

年生の卒業研究終了後という「国家試験勉強に取り組み始めたい時期」に開講されていることが影響していると考えられる。

Q01:この授業に意欲的に取り組んだ。

Q02:この授業から新たな興味や問題意識を持つことができた。

Q03:シラバスに掲げられた達成目標(到達目標)を達成できた。

※Q01～Q03 1)全くそう思わない～5)非常にそう思う の5段階評価

Q04:この科目に関する週当たりの平均事前・事後学修時間(試験対策は除く)

※Q04:1)0-1時間、2)1-2時間、3)2-3時間、4)3-4時間、5)4時間以上

授業科目	Q01 平均	Q02 平均	Q03 平均	Q04 平均
薬学生入門	4.32	4.23	3.97	2.66
情報処理法	4.42	4.28	4.22	1.52
薬と疾病(皮膚・感覚器疾患)	3.98	3.92	3.81	2.50
臨床薬学実習Ⅱ	4.36	4.08	4.08	1.96
臨床薬学実習Ⅲ	4.36	4.18	4.18	2.43
臨床薬学実習Ⅴ	4.63	4.25	4.31	3.13
エデュケーションスキル	4.51	4.13	4.23	2.16
実務実習	4.64	4.61	4.28	3.25
アドバンスト演習	3.71	3.52	3.52	1.81

IV-3 担当科目に対する学生からの授業評価²⁷⁾²⁸⁾

2022年度担当科目における、学生からの授業評価の平均値を示す。

こちらのアンケートもIV-1と同様、他の教員の要因・影響があることを踏まえて評価する。全体として悪い数字ではないと考えているが、事前の授業準備をより整えるべき科目、学生の様子を確認しフィードバックをすべき科目、目標到達のために工夫を取り入れるべき科目が見出された。アドバンスト演習については全体的に低い傾向にあった。学生側は「国家試験勉強をしたい」、教員側にも「国家試験勉強をさせたい」という思いがあったと感じている。大学からは国家試験合格率を上げるためにアドバンスト演習にも国家試験対策を入れるべきという意見が寄せられている。現段階では、“可能な範囲で”国家試験に繋がる要素を入れているのが実状である。

Q05:円滑な授業進行に向けた教員の準備は十分か。

Q08:毎回授業の目標が説明され、その達成に向けた授業が行われていた。

Q11:教員は学生の反応を確認していた。指導やフィードバックが十分に行われていた。

Q14:授業の目的や達成目標で示された能力・資質を身に付けるような工夫がなされていた。

※Q05、08、11、14:1)全くそう思わない～5)非常にそう思う の5段階評価

授業科目	Q05 平均	Q08 平均	Q11 平均	Q14 平均
薬学生入門	4.26	4.42	4.23	4.28
情報処理法	4.28	4.43	4.43	4.16
薬と疾病(皮膚・感覚器疾患)	4.10	4.02	4.04	3.71
臨床薬学実習Ⅱ	4.16	4.16	4.12	4.32
臨床薬学実習Ⅲ	3.96	4.14	4.21	3.52
臨床薬学実習Ⅴ	3.75	4.06	4.00	4.25
エデュケーションスキル	4.10	3.91	4.33	4.03
実務実習	4.19	3.83	4.06	4.25

アドバンスト演習	3.67	3.62	3.52	4.19
----------	------	------	------	------

IV-4 授業に採り入れた工夫などに対するアンケートのコメントによる評価²⁷⁾²⁸⁾²⁹⁾

薬と疾病(皮膚・感覚器疾患)

- ・ slido のシステム楽しかったし面白かったです。
- ・ slido がとてもよかった。
- ・ slido も使いやすかったです。
- ・ slido で、リアルタイムに自分の解答と他の学生の答案率を見ることができるのは面白かったし、刺激になった。匿名性が高いので、変に怖気付いたり落ち込んだりすることもなく良かった。
- ・ 解答がすぐに反映されてすぐに解説がある講義が大学では少ないので、反映の早い講義は、自分はどこまでできていなくて、今何を一番に勉強すべきなのかがすぐにわかる講義はとても嬉しかったし、勉強のモチベーションになった。

臨床薬学実習Ⅱ

- ・ 事前学習用の動画や資料の掲示があったため(良い評価とした)。

臨床薬学実習Ⅲ

- ・ 模擬患者さんと対面でロールプレイをさせていただいて、オンラインや SA さんとのロールプレイとは違う種類の緊張感があるのだなと思いました。

臨床薬学実習Ⅴ

- ・ 事前に動画を公開していたため、やる前からイメージがしやすく良かった。
- ・ エデュケーションスキル
- ・ ディスカッションなどを行い、意見が偏らないようにしていた。
- ・ 学生の意見に毎回フィードバックしていたため(良い評価とした)。
- ・ エデュケーションスキルの概要の講義は良かった。
- ・ 今後は、エデュケーションスキル以外にも勉強面で下級生と関わる機会があってもいいと思う。

情報処理法

- ・ 先生が 2 人いたため、質問がスムーズに出来ましたし、授業を遅らせない様に、1 人が授業をしもう 1 人の人が質問に答えるという感じでしたので良かったです。
- ・ 小テストを行うことで、授業で学んだことをより定着させることができたと思う。
- ・ 少しでもわからないことがある学生のところへ足を運びマンツーマンで対応していた。
- ・ 教員の方が二人体制で遅れを取らないよう、サポートしていただける環境だったので、安心して授業を受けることができた。

V 教育の目標

V-1 短期目標

学生の「自ら学ぶ力」を育成するため、自学自習する環境整備を図る。内的動機づけによる学習が望ましいが、初めは外的動機付けによって学習する習慣を身につけさせる。ESS などの自主学習教材の取り組みをやってよかった、と思えるような仕組みを作る。

科目間の知識を活用する力を育成するために、授業時に関連する科目名と内容を提示する。

提示するだけでは取り組まない学生が多いと思われるため、科目間連携を含めた小テスト(Moodle)を採り入れる。

様々な事例(社会問題、臨床事例など)を提示や出題によって学ぶ意欲を高める。特に身近な例(札幌市や北海道などの事例)、実務実習で必ず接する事例を使った症例を作成して、基礎薬学から臨床まで含めた知識を求めるような症例を作成して、実習や演習で活用する。

V-2 長期目標

臨床薬学系と基礎薬学系の教員間の連携を図り、協力しあえるチームでの教育が行われる環境を作り上げる。

卒業した学生が薬剤師となり、後輩の“実務実習指導者および薬剤師としてのロールモデル”となり、実務実習で学んだ学生が「あのような薬剤師になりたい」と思われる薬剤師を輩出する。

都市部・地方に関わらず、住民が安心して医療を受けられる社会にすべく、各地域の実状や問題を理解し、解決へと導く“地域に根ざした薬剤師”となり、活躍してもらうことを目指す。

VI 添付資料

- 1) 2022年度シラバス(全科目). HUS-UNIPA.
- 2) 2022年度授業アンケート結果(全科目). HUS-UNIPA.
- 3) 2022年度自由科目セミナー履修者一覧. ファイル
- 4) 2022年度第1回FD委員会資料. PDF.
- 5) 2022年度学生FD委員リスト. Excelファイル
- 6) 2022年度学生FD委員追加リスト. Excelファイル
- 7) 2022年度第1回薬学共用試験委員会資料. Wordファイル
- 8) 2022年度第1回国家試験委員会資料. Excelファイル
- 9) 2022年度卒業研究発表要旨集. PDF
- 10) 2022年度臨床薬学実習Ⅲフィジカルアセスメント実習書. PDF
- 11) 2022年度アドバンスト演習フィジカルアセスメント授業資料. PDF
- 12) 2022年度HUS-Moodle>薬学部>薬学科>4年>臨床薬学実習Ⅱ
- 13) 2022年度HUS-Moodle>薬学部>薬学科>4年>臨床薬学実習Ⅲ
- 14) 2022年度HUS-Moodle>薬学部>薬学科>4年>臨床薬学実習Ⅴ
- 15) 2022年度HUS-Moodle>薬学部>薬学科>5年>エデュケーションスキル
- 16) 2022年度薬と疾病(皮膚、感覚器疾患)授業資料. PDF
- 17) 2022年度薬学生入門点数分布表. Excelファイル
- 18) 2022年度情報処理法点数分布表. Excelファイル
- 19) 2022年度薬と疾病(皮膚、感覚器疾患)点数分布表. Excelファイル
- 20) 2022年度臨床薬学実習Ⅱ(液剤調剤)点数分布表. Excelファイル
- 21) 2022年度臨床薬学実習Ⅲ(フィジカルアセスメント)点数分布表. Excelファイル
- 22) 2022年度臨床薬学実習Ⅴ(水剤調剤)点数分布表. Excelファイル

- 23) 2022年度エデュケーションスキル点数分布表. Excel ファイル
- 24) 2022年度アドバンスト演習(アドバンスト・フィジカルアセスメント)点数分布表.
Excel ファイル
- 25) 2022年度情報処理法成績分布表. Excel ファイル
- 26) 2022年度エデュケーションスキル成績分布表. Excel ファイル
- 27) 2022年度前期授業改善アンケート結果. Excel ファイル
- 28) 2022年度後期授業改善アンケート結果. Excel ファイル
- 29) 薬と疾病(皮膚・感覚器疾患)アンケート結果. Google フォーム